

『身をつくし』

なにはえの 葦^{あし}の仮寝^{かりね}の 一夜ゆゑ 身を尽くしてや 恋わたるべき

こうかもんいんのべっとう
皇嘉門院別当

【現代訳】

難波^{なには}の入り江の葦を刈った根っこの一節ではないが、たった一夜だけの仮寝のために、漣標^{みおつくし}のように身を尽くして生涯をかけて恋いこがれ続けなくてはならないのでしょうか？

皇嘉門院別当は源俊隆^{みなもとのとしか}の娘で崇徳天皇皇后^{す と く}である藤原聖子^{ふじはらのせいし}に仕えた女官です。別当は役職名で家政の長官を表します（藤原聖子に仕えた女官のトップ）。保元元年（1156年）に崇徳院が保元の乱に敗れて讃岐^{さぬき}に流され長寛2年（1164年）に崩御^{ほうぎょ}されたことにより皇后である藤原聖子が表立って動けないために数々の歌合に皇嘉門院別当が代理として参加していました。

この歌は承安5年（1175年）に右大臣兼実家歌合で披露された歌で兼実が藤原聖子の実弟である関係から歌合に呼ばれたと考えられます。百人一首にある崇徳院の「（せをはやみ）身を尽くしても逢わんとぞ思う」という歌に対して「身を尽くしてや恋わたるべき」と皇嘉門院（藤原聖子）の気持ちを代弁したと考えられます。

山陽小野田かるた協会 小田 広行